

障害のある子どもをもつ母親と父親の子育て意識に関する比較研究 — フォーカス・グループ・インタビューによる質的分析 —

松井 剛太¹・七木田 敦²

A comparative study of child-nurturing considerations of mothers and fathers of children with disabilities — Qualitative Analysis by Focus Group Interview —

Gota MATSUI¹, Atsushi NANAIDA²

Abstract: The purpose of this study was to examine the important aspects of the support of children with disabilities from the perspective of their mothers and fathers. A focus group method was used to interview the mothers and fathers of six families separately. The interview data were analyzed according to aspects addressed during the focus group interview. Eight categories were considered important by mothers (“pleasure of my child’s life now,” “influence arising from the behavior of others,” “worry of brothers and sisters,” “gratitude for institutional support,” “respite care,” “difficulty of gathering information,” “not letting father do the housework,” and “support from brothers and sisters”). Six categories were considered important by fathers (“worry about the future of the child,” “sports that father plays,” “dissatisfaction with institutional support,” “respite care for my wife,” “I feel that I should not do housework,” and “work-life balance”). Three complementary results were found. First, mothers consider the “now” while fathers consider “the future” of the child. Second, mothers are “grateful” while fathers are “dissatisfied” with institutional support. Third, both mothers and fathers consider that fathers “must not do housework.”

Key words: Children with Disabilities, Child-nurturing, Focus Group Interview, Family System Theory

1. 問題と目的

発達障害者支援法において「家族支援」が明記されたことを契機に、障害のある子どもをもつ親の子育てに関する研究が多く見られるようになった（涌水ら，2011；安田ら，2012）。近年では、特に発達障害の不応行動と家族、学校、社会との関係性に着目し、家族の心理社会的問題に関する研究が増加していることが報告されている（宮内，2012）。

これらの先行研究を概観すると、母親のQOLや育児ストレス（永田ら，2013）、母親に対するペアレントトレーニングの効果（米倉ら，2014）など母親を対象としたものがほとんどである。また父親を含めた研究もいくつか見られるが（篠田，2013など）、同じ子どもを育てる母親と父親をペアマッチで分析したものは見当たらない。

宮内（2012）は、母親への支援が家族全体へ及ぼす二次的な影響まで考慮した検討が必要であることを述べている。例えば、母親のペアレントトレーニングにおいて、仮に母親が望ましい行動様式を身につけたとしても、家族内において父親との役割関係上、それを実行できない

1 香川大学教育学部

2 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設

状態にあるならば意味を持たないだろう。あるいは、母親が望ましい行動様式をとった結果、父親がそれまでと異なる行動をとったため、母親の負担が増加するといったことも考えられる。こういった二次的な影響にまで拡大した分析を行うためには、北川ら（1995）が指摘するように、子育てにかかわる「母親」、「父親」双方の意見を聞き、子育てにおける関係性を明らかにする必要がある。

上記の問題意識から、ここでは家族システム論に依拠して分析を進める。これは、家族を1つのシステムとみなし、その中に夫婦・親子・きょうだいといったサブシステムが存在するものと位置づける（岡堂，1984）。亀口（2010）によると、支援の中心は母親になるにしても、それが夫婦関係、きょうだい関係、祖父母との関係に及ぼす影響を統合的に扱うことで、家族全体をシステムとしてとらえた支援が可能になるという。つまり、子育てにおいて母親、父親がそれぞれに有している役割意識の関係性が明らかになると考えられる。

よって本研究では、障害のある子どもをもつ母親と父親を対象にペアマッチによるフォーカス・グループ・インタビュー（以下、FGI）を行い、家族システム論の観点から分析する。そして、同じ子どもを育てている母親と父親の役割や意識を比較的に検討し、家族全体の支援を実施する際の視点を提起することを目的とする。

II. 方法

1. 対象者

対象は、障害の診断を受けた児の保護者であり、両親ともに調査への協力が可能である6家族であった。表1に家族構成や子育ての背景を示す。調査は2012年1月に行った。6家族に同日同時刻に集ってもらい、母親グループ（6名）、父親グループ（6名）に分かれてFGIを実施した。インタビューに要した時間は、母親グループが1時間16分52秒、父親グループが1時間47分37秒であった。なお、対象者には事前に口頭で本研究の意義、目的、調査方法について説明を行い、調査協力の了承を得た。また調査の実施にあたり、広島大学の倫理審査委員会の承認を得た。

2. 調査方法と調査内容

子育てに関する母親と父親の語りを収集するため、FGIを調査方法として用いた。FGIは同

表1 対象家族の概要

家族構成	家族の背景
Aさん 父, 母, 女児（9歳： 病弱, 知的障害）, 妹	近隣に親族はいないが、隣 県に住む母方の祖母に2～ 3ヶ月に1回位の頻度で来 てもらい、病院の定期受診 の時など支援を受けていた。
Bさん 父, 母, 姉, 男児（9 歳：自閉症）, 弟	近隣に親族はおらず、支援 を受けたことはない。
Cさん 父, 母, 姉, 男児（8 歳：自閉症）, 弟, 妹	近隣に母方の祖父母がおり、週に、2～3回習い事 や、保育所の送迎、仕事で 両親不在時に留守番を頼ん でいる。
Dさん 父, 母, 男児（8歳： 自閉症）, 妹	近隣に親族はおらず、支援 を受けたことはない。
Eさん 父, 母, 男児（10歳： 自閉症）, 男児（8 歳：アスペルガー症 候群, 強迫性障害）	近隣に父方の祖父母、母方 の祖母がいる。父方の祖父 母には多くの支援を受けて いるが、母方の祖母には年 に数回程度である。
Fさん 父, 母, 女児（9歳： 脳性麻痺）	近隣に親族はおらず、支援 を受けたことはない。

じ背景を持つ当事者グループに対して質問をすることで、参加者の相互作用が生じるために個別のインタビューに比して豊富なデータが収集できる（高山ら，1998）。さらにグループ間の比較が可能であるため、母親と父親の間で生じる考え、経験、感情の相違を明示するのに適しているといえる。

インタビュー内容は、①子どもが生まれてから期待したことや心配したこと、②子どもが生まれてから関わった専門機関で助けになったもの、③家族生活の中で、家事や育児をどのように分担しているか、であった。なお、インタビューの内容は、すべてICレコーダーで録音した。

3. 分析方法

FGIの分析手順に沿って行った。まず、語りの内容を文字に起こして逐語録を作成した。次に、一次分析として、FGIの質問ごとに重要アイテム（意味のある発言）を抽出した。そして、二次分析として、類似した内容の重要アイテムを分類して、重要カテゴリー（意味のあるカテゴリー）を抽出してラベルをつけた。さらに、夫婦でどのような発言傾向にあるかを考え、両者を比較的に分析した。

Ⅲ. 結果と考察

1. 一次分析と二次分析の概括

抽出された重要アイテムは、母親グループで60(問①:22, 問②:27, 問③:11), 父親グループで87(問①:20, 問②:47, 問③:20)であった。抽出された重要アイテムから、重要カテゴリーを抽出した結果、母親グループで8(問①:3, 問②:3, 問③:2), 父親グループで6(問①:2, 問②:2, 問③:2)となった(表2)。

2. 母親, 父親の FGI 結果の比較

下記に母親と父親の FGI の結果を比較し、主要な語りを提示しながら、その関係性を示していく。

(1) 子どもが生まれてからの期待や心配

①「いま」と「将来」

母親グループでは、すべての母親が、子どもが活着しているだけでよいという主旨の発言をした。出産を担う母親は子どもの生命の危機を現実的に受けとめるだろう。このような経験から、子どもの障害に葛藤しつつ、「いま命があることへの喜び」を感じていた。

“うちは、生まれた2時間後くらいに呼吸が止まってしまったので、普通の産婦人科で生んだんですけど、それから救急車を呼んで地元の病院のNICUに入ったんです。だから期待っていうより、このまま元気に過ごしてくれれば良いかなと思っています。”(Fさん母)

一方、父親グループでは、すべての父親が「子どもの将来に対する不安」を述べた。泊ら(2013)は、障害のある子どもをもつ父親に対して、子育ての悩みを自由記述で尋ねた結果、「将来」、「就職」という言葉が出てきたことを報告して

いる。本研究においても、父親が子どもの将来的な自立に対する高い意識を持っていることが推察された。

“生まれてから、この子の将来を、障害を持つ子の親はすごく考える。自分も、この子が将来的に成人した時に自立ができるかとか、そのためにこの子に何をしていたらいいのかっていう事を、ずっとちいさい時から考えていた…”(Aさん父)

②親像形成への影響

6人中4人の母親が、「他者の言動から受けた影響」として、怒りや不安の感情を抱いた経験があることを語った。次の母親は、自身の両親との間に下記の出来事があった。

“私は常々親から、「子どもを生んだらその子を大学まで出すことを考えて子どもを育てなさい」って言われていたので、とにかくこの子を大学に行かせなければと生んだ時から考えていた。ちょっと周りの子と比べるとおかしいぞと思ったんですけど、どうしても受け入れたくない。英会話教室に行っても、先生がハローって行ったらただのオウム返してハローって言う度に天才って思うんですね。皆におかしいよって言われても全然受け入れたくなくて病院とかにも行かなくて…”(Dさん母)

氏家(1996)によれば、母親が子育てで葛藤を抱くときには、「理想の母親像」に到達できない無力感が関わってくるという。母親にとって、自身の親は母親役割のモデルになりやすく、その言動から理想の母親像が構築されることもある。障害のある子どもをもつ母親の場合、その理想像に到達することが難しいため、葛藤の一因となりうることが示唆された。

表2 母親, 父親の重要カテゴリー

質問内容	母親グループ	父親グループ
子どもが生まれてから期待したことや心配したこと	・いま命があることへの喜び ・他者の言動から受けた影響 ・きょうだいへの心配	・子どもの将来に対する不安 ・自身がしていたスポーツへのこだわり
子どもが生まれてから関わった専門機関で助けになったもの	・専門機関に対する感謝 ・レスパイトケア ・情報収集の困難さ	・専門機関に対する不満 ・妻のレスパイトケア
家族生活の中で、家事や育児をどのように分担しているか	・父親には家事をさせない ・きょうだいの支え	・家事をしないといけないと感じる ・ワークライフバランス

一方、父親グループで親像形成への影響として考えられるのは「自身がしていたスポーツへのこだわり」であった。2人の父親が子どもに自身がしていたスポーツをさせたいと考えていたが、障害があることによってかなわなくなると述べた。

“自分はスポーツをしていて、インターハイで全国優勝したんです。やっぱり親子2代で、子どもにも全国で優勝して欲しいという夢がありました。でも子どもの障害がわかった時に、その夢は全て飛びました。”(Aさん父)

森田ら(2010)によると、父親役割はモデルとなる他者や父親の役割に関する情報などによって作られるという。しかし、障害のある子どもをもつ父親は、それらを持ちづらいため、父親役割を自ら開拓しなければならない(泊ら, 2013)。父親は子どもとスポーツを通してかわるという父親像を持っていたと考えられるが、子どもの障害により転換をせまられたようであった。

③きょうだいも含めた子育てへの葛藤

本研究で対象とした家族はきょうだいのいる場合が多かった。母親のインタビューでは、障害のある子どもの「きょうだいへの心配」も多かった。

“お姉ちゃんには、弟に障害があるから自分は我慢して色々なものを犠牲に育ててきたと思ってほしくない。弟をプラスに考えてほしいなと思ったので、弟の存在をどう活かせるかなってというのは考えているところです。”(Bさん母)

平野(2004)は、母親のほうが父親に比べて、きょうだいの世話に関する悩みが高いことを指摘している。本研究においても、父親にはきょうだいに関する発言があまり見られなかったが、母親はきょうだいへの心配を述べた。

(2) 子どもが生まれてから関わった専門機関

①専門機関に対する「感謝」と「不満」

すべての母親が「専門機関に対する感謝」を述べた。ただし、子どもへの支援よりも、母親の相談を受け入れるサポートに対する感謝であった。

“通ったところの先生がこんなことで困っているんですって言ったら色々な先生を紹介してくれた”(Eさん母)

“訓練の先生を通して色々相談したりすることも多かったです。”(Fさん母)

しかし一部では、専門機関が親に対して十分な説明責任をしていないことに関する不満も見られた。

“病院の訓練っていうのは子どもが走り回っているのを先生がただ付いて歩くだけで、何をしに行っているんだろうっていう感じだった。”(Dさん母)

このように、親の相談にのったり、親の状況を理解してくれたりすることに加えて、子どもに対する指導の説明責任を果たすことも重要なサポートとなることが考えられる。

一方、父親のインタビューの中では、感謝の言葉よりも「専門機関に対する不満」が多かった。

“先生によってレベルの差がすごくあって、普通の小学校はすごく格差があるんです。この先生が担任で持ってくれた時はすごく良かったけど、それが次の年に引き継がれないっていうのが実際の現状で…”(Eさん父)

以上のように、教員間で差があることに不満を持っていることが多いようであった。前述のとおり、父親は子どもの将来に向けた心配が高い。そのため、将来的に役立つ教育への要望が高いことが考えられる。また次のように、学校に対する意見が聞き入れられないことも不満の一因となっている。

“学校に要望を言いに行ったら、苦情を言いに行っただけという形で「はい、聞きました」って聞き流す。私も2回か3回、教頭先生とか校長先生に話したんですけどね。それでも全然ダメで。ほんとにもう、「はい、お話は聞きました」という感じで。”(Cさん父)

このように、父親が専門機関に強い不満を抱く背景には、母親が父親に求める役割も強く影響していると思われる。母親のグループインタ

ビューではCさんの母親から次のような語りが見られた。

“何かトラブルとかが学校であった場合は、母がいうより父の方がいいって。どうしても言っただけはカンペ(笑)。「これだけは言っただけ」って主人に渡します。”(Cさん母)

父親は配偶者からの具体的な要望に応じて自らの役割を規定することが報告されている(森田ら, 2010)。特に、障害のある子どもをもつ父親は、障害児の世話から逃れられない妻の姿に動かされて父親役割の影響を強く受けるといふ(臼井ら, 2001)。こういった背景から、父親が専門機関とかかわりをもつ機会では、不満や要望を伝える役割を担うことも増えるだろう。そのため、専門機関に対して不満を抱きやすくなっていることが推察される。また、このように妻の影響を強く受ける背景には、父親には妻以外の相談者が少ないこともかかわっているようである。父親グループでは次のようなやりとりがあった。

“基本的にあまりないですよ、心の支えは。信用するのはインターネットであったり、それを使ったネットワークであったりとかということです。”(Fさん父)

“そうですね。僕も同じですね。特に心の支えと言われても見つからないですね。”(Eさん父)

障害のある子どもをもつ父親は、配偶者以外の相談者を持つことが少ないことが報告されている(泊, 1996)。そのため、父親のサポートには、相談を聞いてもらうよりもわが子を大事に扱われる体験が重要になる(谷川ら, 2007)。しかし、上記のように母親との関係上、父親が専門機関への不満を抱きやすい状態にあるならば、専門機関において子どもが大事にされていることが父親に伝わることは少ないだろう。すなわち、父親のサポートにつなげるためには、母親との関係にも考慮しなければならないといえる。

②レスパイトケアの有効性

デイサービスの利用によって、「レスパイトケア」が得られたとする母親が3名いた。

“幼稚園代わりに児童デイサービスの方を利用し始めて、それで助かったのは自分と息子の離れる時間ができて自分が毎日しんどいしんどいってなっていたのがちょっと緩和された。全然しゃべらなかつた子どもが色々なスタッフさんとか子ども達の言葉を聞いて、言葉を覚えて帰ってきて、日本語っぽいことをしゃべり出した時によかったなって”(Dさん母)

このように、デイサービスの利用によって、ストレスが緩和されるだけでなく、子どもの発達についても余裕を持って見守ることができている。父親グループにおいても、6人中5人の父親が、デイサービスの利用によって、「妻のレスパイトケア」が得られたと語った。

“たかがデイサービスなんですよ。かみさんがずっと子どもの相手をしなくていい。ちょっと自分の時間を持たないとやっぱりおかしくなる。いろいろ子どもを見て不安になったりとか、そういう時間をできるだけ少なくしたいなと思ったので、出来れば毎日入って、僕が帰ってから子どもが帰ってくるような状態にしたいなという願望はある。”(Dさん父)

つまり、父親はデイサービスの利用による母親のレスパイトケアを望み、母親も利用しやすい状況にあるといえる。

③サービスへのアクセシビリティ

すべての母親が多様な専門機関からのサポートを知覚していたが、そのサポートを受けるまでの「情報収集の困難さ」について言及していた。

“自分で調べて情報を収集して初めて養護学校がどういうところかという形で、たぶんぼーっとしてたらどこにも行けないっていう感じですね。”(Aさん母)

このような状況に対して、多くの母親が母親同士の繋がりから得られる情報を大切に考えていた。さらに、母親同士の繋がりには情報収集だけでなく、ストレス緩和にも寄与していると考えられる。

“お母さん同士の繋がりってすばらしい。お母さん同士愚痴を言い合ったりとか、そういう

のが自分自身の支えにもなるし、そこで色々な情報を教えてくれるからあれもやってみようこれもやってみようと思える。だから同じように障害児を育てる母親との1つの繋がりがものすごく支えになっています。”(Dさん母)

石本ら(2008)は、障害のある子どもをもつ母親のソーシャルサポートについて、療育機関や医療機関よりも子どもを通した知人のほうがサポートの認知が高いことを指摘している。上記の語りからも、障害のある子どもをもつ母親同士の繋がりが、情報収集も含めた情緒面のサポートにおいて強いことがわかった。

(3) 家事や育児の分担

①家事への意識

すべての母親が、「父親に家事をさせない」ようにしていると述べた。

“けんかした時とかはしてくれたりするんですけど、あまり上手じゃない(笑)”(Aさん母)

“これが寝かしつけまでなぜか子どもの世話はやってくれますけど、洗濯とか食事とかそういうのは一切しないです。やられても大変なことになるんで(笑)”(Dさん母)

笑いまじりの語りであったことから、父親の家事への協力について諦観しているようであった。それに対して、父親グループでは5人の父親が家事はほとんどしていないと述べており、4人は「家事をしてはいけないと感じる」とのことだった。

“家事はちょっと。僕がやると後始末が大変なので、やらないようにしてます。片付けがめんどくさいとか、汚れがすごいと言われるのでやらなくなりました。”(Dさん父)

このように、4人の父親は、実際に家事をやった後の母親の反応を見て、徐々に家事をやらなくなったと述べた。また、父親が家事をしづらい要因には「ワークライフバランス」の難しさも関係していると考えられる。父親グループでは、4人の父親が、自身の仕事のため、家事、育児に関わりにくいことを述べた。

“早く帰りたいですけど、早く帰って欲しい

んでしょけど、なかなか帰れないですよ。でも、妻の雰囲気を見ると早く帰ってきて欲しいんだろうなとは思いますがね”(Bさん父)

障害のある子どもをもつ父親は、定型発達の子どものもつ父親に比べて、育児と仕事のバランスをとることの葛藤を抱きやすいという(森下ら, 2009)。このように、父親が仕事のために家事を遠ざけたい意識と、家事をやらせたくない母親の意識が重なって家事が母親に固定化していったことが推察される。

②きょうだいの支え

3人の母親が、「きょうだいの支え」について語った。母親は、きょうだいの存在が、障害のある子どもの大きな支えになっていると感じていた。これは、父親グループでは見られなかったことである。

“お姉ちゃんがこんなカードがあるんかという感じで、色々と「気持ちを伝えよう」カードを積極的に作ってくれます。”(Cさん母)

先述のように、母親の結果からは、きょうだいへの心配も述べられている。つまり、母親は、きょうだいに対して障害のある子どもを支えてくれることに感謝する一方、我慢を強いているのではないかという思いとの葛藤を抱えているといえよう。

IV. 総合考察

本稿では、障害のある子どもをもつ母親と父親に対して、それぞれにFGIを用いて調査し、母親、父親をペアマッチで見ることによって家族全体の支援について検討した。その結果、次の3点において、家族役割の相互補完関係が成り立っていることが明らかになった。

第1に、母親は子どもの成長に対して「いま」を大切にしているが、父親は将来に目を向けているということである。第2に、専門機関との関係において、母親は専門機関に感謝しているが、父親は専門機関に不満や要望を持つという夫婦像がみられた。第3に、家事の役割分担では、母親は父親が家事に関わることを望んでおらず、父親も仕事上、家事には消極的になっていた。このように、母親、父親をペアマッチにして相互の結果を照らし合わせることで子育てにおける関係性が明らかになった。

第1の点は、母親の障害受容の特徴が関連していると思われる。大野ら(2011)は、母親の障害受容について、第1段階では「現在までの子どもそのものを受容するプロセス」があり、その受容が行われて初めて第2段階である「障害のある子どもの将来への不安の軽減」がなされることを指摘している。つまり、本研究の母親は子どもが幼いこともあり、まだ第1段階にあると考えられる。しかし、家族全体で見たときには、母親がいまの子どものことで心理的な負担を有しているのを補うように、父親が将来のことを考えていることが推察された。

第2の点については、父親役割の形成プロセスが関連している。父親役割は、身近に利用できる「父親役割モデルとなる対象」、「父親の役割についての情報」、「父親の役割行動を期待する配偶者からの具体的な要望」によって形成される(森田ら, 2010)。しかし、障害のある子どもをもつ父親は、同じ境遇にある仲間を作りにくいいため、父親役割モデルとなる対象や父親の役割についての情報が得られにくい。そのため、父親の役割行動として、配偶者からの具体的な要望が大きく影響することになる。大島(2013)は、母親から見た父親のサポートのタイプとして、「心の支えとなる夫」、「いざというときの夫」、「夫と一緒に子育て」の3つを挙げている。本研究では、専門機関との交渉という「いざというときの夫」の側面が大きく、「夫と一緒に子育て」はあまり見られなかった。これは本研究で対象とした障害のある子どもの年齢が学童期であったことも影響していることが示唆される。おそらく、子どもが乳幼児期だと異なった結果が出ただろう。つまり、障害のある子どもをもつ家族の支援には、子どもの年齢に応じて母親が父親に対して有している要望と父親の対応、さらにそこに至るまでのプロセスを考慮する必要がある。

第3の点については、母親のゲートキーピング(Ruth, 2008)にも配慮する必要があるかもしれない。一般に、障害のある子どもをもつ家庭では母親の負担が大きくなるため、いかにその負担を軽減するかがサポートの焦点になる。しかし、本研究の結果から、父親に家事をさせないようにする母親の非明示的なメッセージにより、父親が家事から遠ざかっていくという事情が見られた。つまり、母親の負担を単に父親に移しかえるような支援では解決しない心理的關係があるととらえられる。家事の分担につい

ては、養育当初から、ゲートキーピングの影響により役割が固定化していったプロセスを含めて支援を検討することが必要である。

今後の課題として、次の3点を挙げる。第1に、対象とした家族が少数で、かつすべての母親が専業主婦であった点である。共働きの家族の調査をすることによって、労働も含めた家族システムの様相が詳細になるだろう。第2に、夫婦関係だけでなく、きょうだいや祖父祖母まで含めた家族システムをとらえる必要がある。本研究において、特に母親にとって障害のある子どものきょうだいの存在は、サポートでもあり、葛藤の要因でもあるという両義性を有していた。家族全体のシステムを捉える際に母親と父親だけの調査では不十分である。第3に、家族システムの時間的変化を捉えきれていないことが挙げられる。家族システムは子どもの成長とともに変化をしていく。本稿では、家事分担の語りにおいて、家事役割が子どもの成長に応じて変化していったことが示唆された。子どもの誕生から成長に伴った家族システムの変化を明らかにすることで、その変化に対応した支援が検討しやすくなるだろう。

引用文献

- 平野美幸(2004)脳性麻痺の子どもを持つ父親の意識と行動の変容. 日本小児看護学会誌. **13**(1), 18-23.
- 石本雄真・太井裕子(2008)障害児をもつ母親の障害受容に関連する要因の検討—母親からの認知、母親の経験を中心として—. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要. **1**(2), 29-35.
- 亀口憲治(2010)発達障害の家族支援. 子育て支援と心理臨床. **2**, 6-12.
- 北川憲明・七木田敦・今塩屋隼男(1995)障害幼児を育てる母親へのソーシャルサポートの影響. 特殊教育学研究. **33**(1), 35-44.
- 宮内環(2012)発達障がい児をもつ家族に関する文献検討—心理社会的な問題に関する研究の動向と課題—. 小児保健研究. **71**(2), 282-288.
- 森下葉子・岩立京子(2009)子どもの誕生による父親の発達の变化. 東京学芸大学紀要総合教育科学系. **60**, 9-18.
- 森田亜希子・森恵美・石井邦子(2010)親となる男性が産後の父親役割行動を考える契機となった妻の妊娠期における体験. 母性衛

- 生. **51**(2), 425-432.
- 永田雅子・佐野さやか (2013) 自閉症スペクトラム障害が疑われる2歳児の母親の精神的健康と育児ストレスの検討. 小児の精神と神経. **53**(3), 203-209.
- 岡堂哲雄 (1984) 家族システム理論. 教育と医学. **32**(3), 293-300.
- 大野雄一・長谷川智子 (2011) 母親の障害受容に影響を与える要因についての因果モデルの検討. 発達障害研究. **33**(4), 404-414.
- 大島聖美 (2013) 中年期母親の子育て体験による成長の構造—成功と失敗の主観的語りから—. 発達心理学研究. **24**(1), 22-32.
- Ruth Gaunt (2008) Maternal Gatekeeping: Antecedents and Consequences. *Journal of Family Issues*, **29**(3), 373-395.
- 篠田有希 (2013) 発達障害を持つ子どもの親における障害の認識・理解とストレス—父母間の相違に注目して—. 白百合女子大学発達臨床センター紀要. **16**, 74-82.
- 高山忠雄・安梅勅江 (1998) グループインタビュー法の理論と実際—質的研究による情報把握の方法—. 川島書店.
- 谷川涼子・中村由美子 (2007) 障害児をもつ家族の障害受容と自己効力感・健康状態. 日本看護学会論文集小児看護. **38**, 137-139.
- 泊祐子 (1996) 障害児をもつ家族に関する研究—生活の変更との関連から—. 滋賀県看護学術研究会誌. **1**(1), 24.
- 泊祐子・竹村淳子・牛尾禮子・長谷川桂子・塚本康子 (2013) 健常児をもつ父親研究との比較による障がいのある子どもをもつ父親の父親意識の形成の特徴に関する文献検討. 小児保健研究. **72**(3), 452-459.
- 氏家達夫(1996)親になるプロセス. 金子書房.
- 臼井雅美・渡部節子 (2001) 父性性に関する研究—既婚男性の性役割観の特徴と父性性に影響を及ぼす父子関係との関連について—. 母性衛生. **42**(2), 360-367
- 涌水理恵・藤岡寛・古谷佳由理・宮本信也 (2011) 発達障害児を養育する家族のエンパワメントに関連する要因の探索—Family Empowerment Scale 日本語版を用いて—. 小児保健研究. **70**(1), 46-53.
- 安田すみ江・後藤麻美・加村梓 (2012) 発達障害を持つ児の保護者の育児上の困難さに関する調査. 小児保健研究. **71**(4), 495-500.
- 米倉裕希子・堤俊彦・金平希・岡崎美里 (2014) 発達障害児のペアレントトレーニングの有効性に関する研究—家族の感情表出とペアレントトレーニング—. 関西福祉大学社会福祉学部研究紀要. **17**(2), 17-22.

謝 辞

本研究に快く参加して下さったご家族の皆様様に深謝いたします。また調査を実施するにあたり、ご協力いただいた香川短期大学の常田美穂先生、ご助言をいただいた Judith Duncan 博士に感謝申し上げます。

付 記

本稿の一部は、日本特殊教育学会第50回研究大会にて報告された。なお、本研究は、平成21～23年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)(課題番号21402045 代表 七木田敦)の補助を受けて行われたものである。